

はじめに

福原裕二
吉村慎太郎

北朝鮮、イラン、イラクを糾弾し、イラク戦争の口実にもなる「悪の枢軸」という言葉は、どのような経緯で生まれたのだろうか。

ニューヨークの世界貿易センタービル二棟やバージニア州アーリントンのペンタゴン（国防総省庁舎）といった米国の経済・軍事の中核施設を狙い撃ちにした二〇〇一年の「米国同時多発テロ」（九・一一）事件からすでに二〇年以上が経過した。

世界を震撼しんかんさせる映像とともに報じられたこの事件を契機に、翌一〇月には、首謀組織とみなされたアルカイダの指導者ウサーマ・ビンラーディンの身柄引渡しを拒否し、同組織に訓練施設を提供していたとされたアフガニスタンのタリバーン政権打倒を目的にした「反テロ戦争」が実施された。この戦争とその後の混乱のなかで、アフガニスタンでは九・一一事件の

死者数（約三〇〇〇人）の一〇倍以上に達する人的被害が生み出された。だが、当時のG・W・ブッシュ大統領率いる米國政權の「テロの根絶」を目指した強硬姿勢は、それで終わらなかつた。アルカイダだけでなく、「世界平和」を脅かす存在とみなした反米諸國へと、敵意の矛先を拡大したからである。その姿勢は、九・一一事件から一四〇日後の〇二年一月二九日にブッシュが発表した米國連邦議會向け「一般教書演説」で明らかになった。

その演説では、第一の目標に「テロリストの根絶」を設定しただけでなく、第二の目標として、「テロ支援國」の大量破壊兵器（WMD）開發による、米國と同盟國に対する脅迫行為の阻止が据えられた。そして、北朝鮮、イラン、イラクの三カ國が「危険國家」、すなわち「惡の枢軸 Axis of Evil」に位置づけられた。

たとえば、「北朝鮮はその市民を飢えさせながら、一方でミサイルと大量破壊兵器で武装した政權」であり、また「イランは選ばれたわけでもない少数者が自由を求める國民を抑圧する一方で、それら（WMD）を積極的に追い求め、テロを輸出している」と糾弾した。そして、「イラクは米國への敵意を誇示し続け」、「一〇年以上もの間、炭疽菌や神経ガス、そして核兵器開發を企み」、「毒ガスを使って自國民数千人を殺害し」、「國際的な査察に同意しながら、査察官を追い出し……文明世界から何かを隠しているのがこの政權である」と厳しく非難した。

そのうえで、「我らの同盟国を脅かし、米国を脅迫」するこれら政権の「いずれにも無関心であれば、代償として大惨事を招くことになろう」と警告した。

こうした非難が単に口先だけでないことは、イラクのサッダーム・フサイン政権を崩壊に導く〇三年三月のイラク戦争で明らかとなる。アルカイダとの緊密な関係、秘密裏のWMD開発、国民を苦しめる独裁体制といった諸点が開戦理由として掲げられ、ロシア・フランス両国の強い反対を押し切り、武力行使を容認する国連安全保障理事会決議に依拠しないうまま戦端が開かれた。確かに、サッダーム率いるバアス党（アラブ復興社会党）政権が独裁政権であったことは事実だが、残るふたつの理由に具体的な裏付けはなく、「言いがかり」でしかなかった。

特に、「悪の枢軸」演説で言及されたWMD開発の痕跡が結局発見されずに終わったことは、いかにこの戦争が米国の単独行動主義に発した恣意的かつ不条理な軍事行動であったかを物語する。当時の日本政府も十分な検証をせずに支持したこの戦争によって、イラクは戦後頻発するテロと不穏な政治情勢のなかで、アフガニスタンと同様に、多大な人的・物的被害を受けることとなる。

加えて、ブッシュ政権の北朝鮮への対応もまた一方的であった。A B C (Anything But Clinton—クリントン政権の政策は継承しない) の立場から、従来の対北朝鮮政策が見直され

ると同時に、「悪の枢軸」認識に立脚し、平和目的であれ兵器開発目的であれ、北朝鮮の核開発計画は「完全に、検証可能で、不可逆的に廃棄」されなければならず、さらにNPT（核拡散防止条約）とIAEA（国際原子力機関）にも復帰しなければ、外交交渉の相手にもしないというのが、ブッシュ政権の政策となった。この政策に不満と不信感を募らせた北朝鮮は、核関連施設の封印を解除し、監視カメラを撤去して再稼働を始めた。また、先述のイラク戦争の強行が「重大な主権侵害行為」との連鎖的な恐怖心を北朝鮮に植えつけたことで、核兵器開発の「疑惑」を利用しようとするそれまでの姿勢から、核抑止力の確保を追求する政策への転換を北朝鮮に促す結果ともなった。それが北朝鮮による二〇〇五年二月の「核保有宣言」、そして翌〇六年一〇月の最初の核実験の実施へと連動していく。つまり、「悪の枢軸」演説やその非難のもとに展開されたイラク戦争と非妥協的な姿勢は、北朝鮮の核兵器開発を誘発する結果を生み、米国の東アジアにおける同盟国をさらに脅かす事態を招いている。

さて、この「悪の枢軸」という用語が、ブッシュ大統領のスピーチライター、D・フラムの着想に由来することは知られている。

フラムはサッダーム政権打倒の理由付けとなる簡潔なフレーズの考案を依頼されたという（だからこそ、イラク非難がより詳細でもある）。そして、一九四一年一二月七日の真珠湾攻撃

によって、ドイツ、イタリア、日本からなる「枢軸国」(Axis Powers)が世界的脅威になった国際情勢が九・一一後の状況に類似していると考えた彼は、米国に反対する「憎悪の枢軸」(Axis of Hatred)とこの表現を提出した。これをチーフ・スピーチライターのM・ガーンソンが「悪の枢軸」に書き換えた。それを受け、ブッシュ自身がその構成国にイランだけでなく、最後に北朝鮮を加えたという(Frum, 2003, p.238)。

つまり、「悪の枢軸」は、まずはイラク・サダム政権打倒ありきに始まり、米国の意に沿わない「危険視」された国家を一括りにしようとの発想のもとで、「枢軸国」という歴史用語をヒントに編み出された。そこに「悪」なる形容を施したのは、八〇年代にレーガン政権がソ連を「悪の帝国」と呼んだことにも関係するかもしれない。そうした経緯があれば、「悪の枢軸」の構成国は、そのレッテルの発案・利用者側の思惑次第で変更、拡大されても不思議ではない。

実際、ブッシュ政権の國務次官J・ボルトンはキューバ、リビア、シリアを、またイスラエルはパレスチナのガザに拠点を置くハマース(イスラーム抵抗運動)を、そしてサウジアラビアはムスリム同胞団をそれぞれ「悪の枢軸」に加えた。その恣意性もあって、二〇一〇年以降に一部メデアでは、反イスラエル連合として、シリアを支援するイランを中心とした「抵抗

の「枢軸」といった呼称が用いられるようになる。さらに、二〇二二年二月にウクライナに侵攻したV・プーチン政権下のロシアや、その侵略を支援するA・ルカシエンコ大統領下のベラルーシ、そしてロシアの暴挙を自国の膨張主義的政策と重ね合わせ、対ロシア制裁に抗^{あらが}う姿勢を示す中国まで、「悪の枢軸」に括られるかもしれない。こうした国際政治の展開のなかで浮上するこの言葉の意味を再考するならば、今後もなかなか消え去りそうにない。

本書の目的は、〇二年のブッシュ大統領の一般教書演説から二〇年以上が経過するなかで、「悪の枢軸」として指弾された、東・西アジアの安全保障を脅かし続ける北朝鮮とイランの「正体」（素顔）を明らかにすることにある。もちろん、これまでも、それら両国を個別に取り上げた書物や論文は多いが、一冊のなかで両国を詳細に分析する試みは日本では皆無に等しい。個性豊かな歴史と文化に彩られ、独特の政治社会システムのもとで国家運営がなされていることから、ひとりの研究者がそれら両国を分析することはそもそも困難である。それゆえ、長年にわたって現地調査を続けてきた私たち二名がそれぞれの国を担当しながら、一冊の書物としてまとめた。そして、存外理解されないままにきた諸点を数多く盛り込み、レットルやイメージ先行の理解とは異なる両国の姿を浮き彫りにしよう^とと心掛けた。

まず、第一部では、「不可解で、何を^{して}かすか分からない国」とされがちな北朝鮮の国

家・社会の内実を、「メタ・フィクション」という切り口から描き出すことを試みている。また、ひとりの特異な存在の君臨する国家社会主義体制、自主・独立（主体）を目指す外交、そして朝鮮半島の統一問題にも適宜検討を加えながら、分断国家として北朝鮮が誕生し歩んできたプロセスを明らかにする。さらに、北朝鮮にとっての安全保障に留意しつつ、核問題の展開を整理し、この国の政権の言動に見られる論理の特性を導き出し、そのうえで変化を余儀なくさせる「非核化」に対する耐久性という問題を考察していく。

第二部では、まず現在のイラン政権を呼称する際にしばしば用いられる「原理主義」を糸口に、その後一九七九年革命の歴史的背景を概観したうえで、多様な勢力によって達成された革命のイスラーム化、米国が「大悪魔」視された背景とその特質や「イスラーム法学者の統治」体制の構造的特質を検討していく。そして、カーターからクリントンまでの米国政権の対イラン政策の特徴や変化を取り上げたうえで、最高指導者ホメイニー没後に浮上し、激化していくイランの国内党派対立、さらに九・一一事件から「悪の枢軸」発言に至るその背景と影響を見ていく。それらを踏まえて、続く第五章では、二〇〇二年に急浮上するイランの「核兵器開発」疑惑の展開過程を、イスラエル・ファクターや、イランの「保守派」の攻勢との関わりを交えながら論述する。そして、終章では米・伊対立の複合的な性格とイラン内政への影響を検

討し、「核兵器開発」疑惑を再考したあと、最後に「悪の枢軸」を超えて留意すべきイランの「正体」に関わる論点を整理することとした。

以上からも分かるように、本書は北朝鮮とイランの二国間関係を検討するものではなく、「悪の枢軸」とみなされた両国それぞれの歴史を絡めながら、その「正体」への理解を深めようとするものである。

裏を返せば、国際政治において主導権を發揮し、北朝鮮、イラン、イラクを「悪の枢軸」として描き出し、そのもとで政治的圧力だけでなく、軍事介入姿勢さえちらかせる米国の「正体」にもおのずと迫ることになる。このような点も含めた本書の意図が少しでも浮き彫りになれば、私たち執筆者にとってはこのうえない喜びである。

Frum, David, *The Right Man: An Inside Account of the Surprise Presidency of George W. Bush*, Weidenfeld and Nicolson, London 2003.